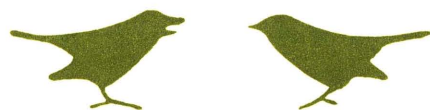


幼 兒 教 育 研 究 雜 誌

# 婦 人 子 供



第 九 卷 第 二 號

## 目 次

● 冬の山里	S
● 我國に於ける幼稚園の特色	K
● 二宮尊徳先生	和 田 實
● 父兄に對する希望	光 蔭 泰 次 郎
● 幼兒の遊戲は如何に指導す可きか	如 柳 子
● 婦人百話	後 藤 ち と せ
● 玩具の遊び方	樂 天 子
● 嬰兒の哺育	中 村 五 六
● 婦人と家政	R H 生
● 獨逸に於ける學生給食法	乘 竹 孝 太 郎
● お加童話(鈍太郎)	と と 子

フ レ ー ベ ル 會 社 發 行

# フレーベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ナ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ贈出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ會員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
  - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育彙列品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
  - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
  - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
  - 一 雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス
  - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ利益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 會長 一人 會務ヲ總理ス
  - 主幹 一人 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス
  - 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
  - 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
  - 第八條 會長ハ客員ヨリ推薦スルモノトス
  - 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
  - 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ヶ年トス
  - 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
  - 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルトコトアルベシ
  - 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコト不得ス

# 本會役員

會長	東京女子高等師範學校長
主幹	東京女子高等師範學校教授
庶務幹事	東京女子高等師範學校保母
會計幹事	東京女子高等師範學校保母
會計幹事	東京女子高等師範學校保母
庶務幹事	東京女子高等師範學校保母
庶務幹事	東京日本橋坂本小學校保母
庶務幹事	東京女子高等師範學校保母
會計幹事	東京女子高等師範學校保母
庶務幹事	東京女子高等師範學校保母
編輯主任	東京女子高等師範學校生徒
	東京女子高等師範學校助教

高村	池田	雨森	小關	大田	和武	川口	福井	下田	和實
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
秀	秀	秀	秀	秀	秀	秀	秀	秀	秀
六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫

# 質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

# 入會又ハ購讀手續(振換口座一七二六六)

本會に御入會なさらうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年分をまとめて振替貯金(口座番號一七二六六)へ御拂込下されば直に登録して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

# ●●豫約募集●●

フレイベル會編纂

## 幼稚園 小學校 遊戲的 手工 圖形

定價

金壹圓五拾錢

郵稅

未詳

右は主として幼稚園に於ける手技及小學校の初學年に使用せらる可き手工の圖形約四百個を蒐集したるものにして新教育主義の實現上必要な教材書なり。本會は特價金壹圓を以て五百部を限り豫約募集す希望者至至急申込む可し、但し應募者既定數に満たざる時は出版せざる可し。

東京女子高等師範學校内

明治四十一年八月

フレイベル會

東京女子高等師範學校 教授  
東京女子高等師範學校助教授

中村五六  
和田實 合著

# 幼 兒 教 育 法

## 一 名 改 良 せ ら れ た る 幼 兒 保 育 法

教育の隆盛前古に比なき明治の聖代にも未だ幼児教育に關する系統的説明を試みたるものなく所謂名士の斷片的言説の徒に世人を迷はすあるのみ。是本書の因つて出づる所以なり。世の父兄たり教育家たるもの精讀せざる可からず。

菊版美裝

定價金壹圓 郵税金拾錢

フレール會員一割引

發 行 所

東京女子高等師範學校内

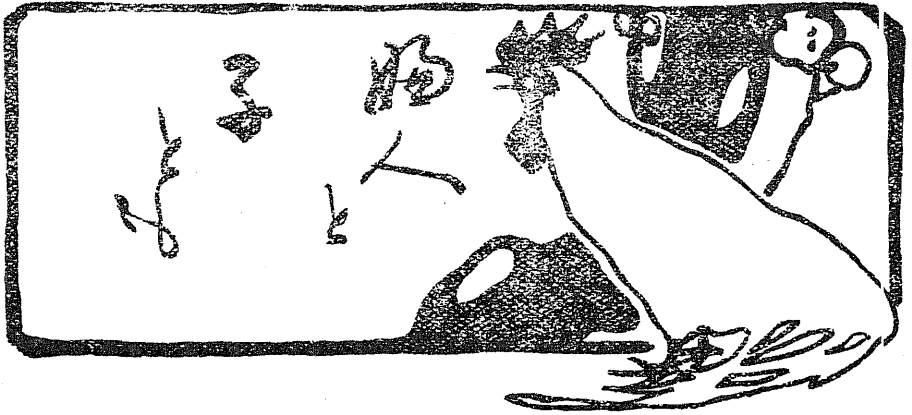
フ レ ー ル 會

發 賣 所

東京市神田區表神保町

東 京 堂

振換貯金口座一七二六六



第九卷第二號

冬の山里

S K 生

蜂の木枯音さむみ

いろくの草枯れはて、

軒端の小川のこほりそめ

山田そよぐ夕風に

とふ人もなき山里に

身を活されず安らかに

我はいねまし草の床に

名懸位なうち忘れ

瀧る世歎きやみはて、

神の御膝にねむらんと

越方魁へはほのくると

枯野の草をやきすて、

花咲き匂ふ山里の

胸のほのほは消うせて

行末ぞろろしのぶれば

ふくろ鳴く聲うら寒み

木の葉ひらく舞落つ

虫の啼く音も絶ぬらし

襤褸の少女ひびに泣く

なびくや茅屋の薄烟

誰がすむらん世の塵に

草の蔭に夢あたくかく

心きよらにいつまでも

自然の神の膝のべに

戀も望もたへぬれば

思へと心くるふかな

もゆる胸の思ひこそ

小川の氷をときげさめ

夢の跡こそ荒野原

はだへ冷たく聲ゆかな

薄にそよぐ風白く

雪かみぞれか頬のへに

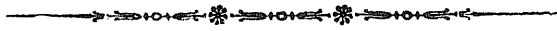
# 我國に於ける幼稚園

## の特色

和田 實

幼稚園の開祖フレネルは其哲學的神秘的教育思想を根據として從來闕却せられたる幼児教育其の必要を主張し其特種なる教育の場所として幼稚園の教育を絶叫した。併し現今歐米に於て盛んに施設せらるゝ幼稚園事業は斯の如き積極的教育思想より割り出せる經營には非ずして多くは社會組織の改良又は其完成なる標榜の本に主として慈善的に經營せらるゝもので其方法に於ては兎も角其思想に於ては單に家庭の不足を補足し其教育の進程として阻害なからしめんとするものである。勿論數多き幼稚園が悉く然りとも云へまいが從來の報告は概して斯る傾向の多きことを記載して居る。此思想に従へば幼稚園は今後益托兒所としての施設經營を必要とし職工、行商等一般下層民の便宜を計り且其子弟をして不完全なる家庭生活よ

り生ずる非教育的弊害からして脱出させ様とするのが幼稚園本来の性質とならなければならぬ。然るに從來我國に於ける幼稚園は斯る社會的思想に因つて發達し來つたのではなくて單に幼児教育の必要若しくは一般教育の完成の爲めに緊要なる基礎の築造と云ふ様な思想が本になつて輸入され發達し來つたもので恰も近來清國が盛んに幼稚園の輸入をして居るのと同様であつたと思ふ。從つて托兒所の慈善主義の幼稚園は極めて稀少なもので多くは中流以上の子弟の教育を受くる所となつて居る。從つて其教育の實行上に於ても父兄の便宜を計るとか其手数を省くとか云ふ様な考へは幼稚園當事者に向つて要求す可きものとなされて居らぬ單に如何にせば完全なる教育は施し得可きやと云ふとにのみ腐心するのが保育者の任務となつて居る。比較的完全なりと云はれて居る、幼稚園程殊に斯る傾向は益多い。甚だしきは彼の特殊の學校などで見る様な一種強大な權力を幼稚園が持つて居て其教育上の主義方針を確立して若し父兄にして是等の主義方針に飽き足らないとか若



しくば幼稚園に向つて其主義方針に反る様な要求を拒絶するものと云ふ様になつて居るのがある。宛に角一般に我國の幼稚園は中流以上の家庭の爲めに完全なる基本的教育を施さうとして居るのが事實であつて下層民の爲めに慈善的趣旨に因りて成れるものは極めて少數である。斯る傾向は確かに我國に於ける幼稚園が外國の夫れと比較される特色の一つに相違ない。而して此特色は或一部の人の云ふ様に果して取り去らねばならぬものであらうか。歐米に於ける多くの幼稚園の様に漸次に托兒所的施設に變更しなければならぬものであらうか、と云ふことは大に研究に値する問題であると思ふ。今茲に之に關する我輩の所見を開陳することは此問題を識者の机邊に呈して敢えて一考を煩はしたいと思ふからである。

一般教育社界より見離されて居る此重要なる幼児教育に關し多少なりとも識者の注意を喚起するところが出来るならば望外の幸である。由來我國人は極めて眞面目なる思潮を有するものである。

問好きな國民で亦教育好きの國民である。子弟の教育に關する意識は決して希臘や羅馬の夫れにも劣るまいと思ふ。此の如く眞面目なる教育好きの國民に幼稚園が歡迎されたのは當然の事である。是れが中流以上の士人に著しく注意されたのは寔に所以ある所である。故に現在の幼稚園が比較的、生活程度の高き家庭の子弟を教育し其初步の發達を遺憾なからしめんことに向つて活動して居るの

は決して怪しむ可きことでないのみならず此傾向は今後とも決して改めしむる必要を認めないのである。人或は從來に於ける我國幼稚園の効果が思はしくないと云ふことで現在の幼稚園の存立を疑ふものがあるけれど是は自ら現在の教育思想と相容れぬ忘斷な意見である。現在一般の教育思想が幼児教育の可能を認めて居る以上は其を特に教育せんとする場所の存在は家庭以外より亦之を認めても決して不合理な點はない筈である。既に家庭以外に幼稚園の教育場がありとすれば幼稚園の存在は決して否む譯には行かまいと思ふ。勿論現在

の幼稚園は多々改良す可き點を持つて居る。從來

の保育法には貫徹せざる節々が多かつた。併し漸次進歩し來れる所の科學的教育學は亦我幼兒教育の前途を輝かすに炬然たる光明を以てして居る云はねばならぬ。此新思想を以て此幼稚園を改良し益以て我國に於ける幼兒教育を完備ならしむることは教育國民と云はるゝ我國民の誇りとす可き所であつて決して此事業を衰へさせ幼兒教育を暗黒ならしむるを以て満足す可きでない。或は又云ふ幼稚園がなくとも幼兒教育は存在する。幼稚園は衰微しても幼兒教育は盛ならしむることが出来る。中流以上に於ける家庭に於ては其子弟を幼稚園に送らずして幼兒教育を行ふ可きなりと。一應尤もなる議論の様ではあるが世間果して能く斯の如く完全なる幼兒教育、少くも三才乃至六才の幼兒の廣大なる活動に適應す可き遺憾なき設備を有し且之を指導する技量ある保育者を有する家庭ありや。母親は天然に於ける最上の教育者たる可きものである。然も實際に於ては其智見に於て其技術に於て申分なき母親と云ふものは寥々として曉天の星である。況んや幼兒の教育が純然たる一種

の技術。然も益々進歩す可き技術たる以上は専門の技術家をして母親の爲す所を補足するのみならず尙其れ以上の技術を幼兒教育の上に振はしむることは完全なる教育を希望するものゝ當然探る可き所である。云はねばならぬ。此必要に應じて幼稚園は益發展の餘地を有するもので國民一般の爲めに小學校と等しく普及の價値の大なるものである。勿論特種の實際に當りては種々の事情あり一概に子弟を幼稚園に送ることは出来ないが廣く一般に見るときは此必要を絶叫せずには居られぬ次第である。故に吾人は我國の幼稚園が歴史的に有する前述の特色は將來に於ても益發揮せしむ可きものであると思ふのである。併し是を以て吾人は幼稚園の托兒所的傾向を採るに反對するものとなすは早計である。社会は多くの階級ある人々に因つて成り立つて居る。一般の中流社会に屬する人々の爲めに幼兒教育をする處が必要であるならば同時に下層労働者の子弟にも幼兒教育を施す必要のあることは無論のことである。是に於てか慈善的施設を以て是等



の 缺 乏 を 補 足 す る こ と は 社 會 組 織 の 改 良 上 當 然 の 事 事 と 云 は ね ば 不 然 也 従 つ て 吾 人 は 汎 汎 單 に 幼 稚 園 と 云 ふ も の の 中 に 斯 種 の 特 種 の も の の 存 在 す る こ と を 拒 ま ぬ と 同 時 に 普 通 的 一 般 的 な る 幼 稚 園 の 存 在 す る こ と が 絶 体 に 必 要 で あ る と 信 ず る の で あ

る 人 或 は 又 現 在 の 幼 稚 園 を 參 觀 し て 其 設 備 の 足 ら ざ る こ と や 其 恩 物 使 用 法 の 沒 趣 味 な る こ と を 以 て 幼 稚 園 教 育 の 効 果 を 疑 ふ も の が あ る け れ ど も 方 法 は 幾 等 で も 改 良 す る こ と が 出 來 る 改 良 の 餘 地 あ る 變 化 の 本 体 を 一 種 の 型 の 如 く に 心 得 て 是 を 以 て 幼 稚 園 の 全 部 を 考 へ 様 と 云 ふ の は 少 し 見 當 違 ひ の 管 見 と 云 は ね ば 不 然 也

或 は 一 部 の 醫 者 の 間 に は 疾 病 傳 染 の 上 か ら 幼 稚 園 を 批 難 し 様 と して 居 る 人 も あ る 様 で あ る が 是 等 も 餘 り に 憶 病 に 過 ぎ た 者 で 其 結 果 は 角 を 矯 め て 半 を 殺 す の 類 と 云 は ね ば 不 然 也 勿 論 多 數 の 幼 兒 の 集 合 す る 所 で あ る か ら 疾 病 は 多 少 傳 染 の 機 會 を 多 く 持 つ て 居 る で は あ ら う が 併 し 是 は 園 兒 の 定 員 を 少 く し 其 衛 生 的 設 備 を 完 全 に す る こ と に 因 つ て 充

分 に 豫 防 す る こ と が 出 來 る と 思 へ る 或 は 幼 稚 園 は 上 流 社 會 と 下 層 社 會 と に は 必 要 で

一 般 中 流 の 家 庭 に は 必 要 が ない と 云 ふ も の も あ る が 是 が 抑 も 誤 り で あ る 今 日 一 般 中 流 社 會 の 人 士 の 子 弟 は 果 して 遺 憾 な 幼 兒 教 育 を 受 け て 居 る で あ ら う か 彼 幾 多 の 商 家 の 幼 兒 等 は 果 して 完 全 な 環 境 に 置 か れ て 居 る で あ ら う か 聞 く 所 に 因 れ ば 多 く の 商 家 の 子 弟 と 云 ふ も の は 遊 ぶ 所 も なく 指 導 す る 人 も な き 店 裏 の 小 坐 敷 の 中 に 間 食 の 惡 習 に

親 し み つ づ け ぬ も の の 比 々 皆 之 れ で あ る 假 令 幾 分 餘 裕 の あ る 商 家 と 云 へ ど も 幼 兒 を 看 護 す る も の は 精 々 子 守 か 老 人 に 過 ぎ ぬ も の で あ る 斯 種 境 遇 の 本 に 置 か れ た る も の が 完 全 な 發 達 を 遂 ぐ る 理 由 が ない 此 點 より 考 へ ば 幼 兒 は 成 る 可 く 早 く 專 門 の 教 育 家 に 委 任 し て 其 教 化 を 受 け し む る の が 至 當

で あ る 要 す る に 吾 人 は 我 國 の 幼 稚 園 が 其 一 般 的 普 通 的 性 質 を 歴 史 的 に 維 持 し て 居 る こ と は 教 育 上 悅 ぶ 可 き 現 象 と して 益 々 發 展 の 機 會 を 與 へ る こ と を 切 望 す る も の で 有 る



# 一宮尊徳先生

光藤泰次郎

一、模範的人物 私に常に申して居ります、東京を中心として、之に隣接する三縣、千葉、埼玉、神奈川の三縣に於て、若し模範的人物を求めましたら、明治の今日は措いて問はず、徳川時代に於ては、千葉縣では伊能忠敬先生であります。埼玉縣では塙保己一先生であります。そして神奈川縣ではここに申しのやうとする二宮尊徳先生であります。この三人の大人物は何れも傑出した所があつて、吾々の模範とすべき點があつて、各自縣の人には勿論、苟も日本人たる以上は皆夫々其の事蹟を研究して、感化を受けて然るべきであらうと思ひます。

二、平民的大偉人 伊能先生と塙先生とは、またいふべき機會があらうから、他日に譲るとして、こゝには神奈川縣より崛起して、幾多の廢家を興復し、廢村を興復し、其の遺教は今日なほ十分生命を有するのみならず、なほ益々世人を教化し感化しつゝある所の二宮先生に就て語らうと思ひます。二宮先生の傳記を読んで見ますと、先生が彼のやうに大偉人になられたのは、先生の天稟にすぎた所があつて、その上に困難貧苦が良教師となつた爲であらうと思ひます。誰も其の外に先生を教育したものはないのであります。言ひかへて見ますと、先生自身が己を教育したのと、天然の人に對する壓迫とか先生を教育したのであります。孟子に文王なくして興るものは豪傑であるとかいてあつたやうだが、先生の如きは獨力を以て崛起した豪傑、平民的大偉人というて差支なからうと思ひます。

三、先生の誕生地柏山村 二宮尊徳先生は、天明七年の七月二十三日相模國足柄上郡柏山村に生れました。柏山村今は新村櫻井村の大字であつ

て、國府津より約二里、小田原より約一里の北方  
 酒匂川の西方にありませす。先生生誕の家は、もは  
 や残つては居りませせん、其の家のあつた地は、叔  
 父萬兵衛の子孫の所有地となつて、桑畑となつて  
 居るそつでありませす。先生のお父さんは二宮利右  
 衛門といつて、餘程好人物のやうであつたやうで  
 す。お母さんの名はわかりませせんが、足柄上郡曾  
 我別所村川窪某の女でありませす。二宮氏の祖先は  
 曾我氏であるといふとである。柏山村及びその附  
 近に二宮を名のるもの昔は十四家、今は十六家あ  
 りとか。總本家は二宮長太郎氏として、家道なかな  
 か盛えて居るといふとである。

四、先生の家庭 傳へる所によると先生の祖父銀  
 右衛門は、常に節儉を守り、家業に力を盡くし、  
 頗る富有を致されたといふとである。して見ると  
 二宮先生の勤勉、力行なる性格は或は祖父より遺  
 傳されたのかも知れない。父の利右衛門は村の人  
 が善人といふたとの事、村の人が請ふまゝに或は  
 施したり、或は貸し與へたりして、數年のうちに  
 家産をへらし、積み貯へてあつた資財を悉くなく

して、貧窮に迫つた。けれども利右衛門は其の貧  
 苦に甘んじて、昔し貸したものをや、施したものをか  
 ら、恩がへしをして貰ふを思はなかつたといふ  
 傳へがある。して見ると村の人が善人といつたの  
 は尤の次第であつて、二宮先生の慈善的性質は、  
 此の父なる人の性格を遺傳せられたものであらう  
 と思はれる。之を要するに、先生が勤勞といふと  
 を非常に重んぜられて、之を實行し之を主張せら  
 れたが、此の方面は祖父銀右衛門よりの遺傳であ  
 らうかと思はれ、先生が推讓報徳等慈善的の行爲  
 性格は父利右衛門よりの遺傳であらうかと思はれ  
 る。

五、天然の壓迫 先生の兄弟は、先生を頭として  
 三人兄弟であつた。貧困に迫つてからの三人の子  
 供で、父利右衛門母某の艱難辛苦は一通りでなか  
 つたらうと想像せられる。唯さへ困苦し缺乏して  
 居るのに、天は茲に一大不幸を二宮先生の家に下  
 した。非常なる壓迫を先生の家に加へた。それは  
 何であるかといふに、外でもない、先生が僅に五  
 歳の時のとであるから、丁度寛政三年のとである

柏山村の東の方を流れて居る酒匂川が、大雨のため、洪水が汎濫し、堤防を破つて、數ヶ村を流亡させた事である。これがために利右衛門の田地畑最早澤山もなかつたのであるが、一畝も残らず悉く石河原となつてしまつた。此の天然の壓迫に抵抗しながら、子供を養はれた利右衛門夫婦の苦心はどれ程であつたらうか、先生は幼いながら天然の壓迫のどんなに殘酷なものであるか、實物の教訓を受けられた事であらうと思はれる。それから生活の苦しい事や、父母が難儀のうちに子供を養はれる其の苦心を體得された事であらうと思はれる。先生の高弟富田高慶氏のかゝれたものによつて見ると、先生修身話が此の事に及ぶと必ず涙を流して、父母の天恩限りなきことを説かれた。これを聞くも、皆袖をうるはしたとの事だ。五、活きた教訓、至誠の化身 世話にくだいていへば貧の盗みといふ、漢語で六かしくいへば、小人窮すれば竊に濫すといふやうに、恒心あるものでなければ、貧乏して立派な行爲は出來がたい。ついでに腹はかへられぬとさもしい心を起し、さ

もしい行を爲し易い。君子でない以上には窮しても決して濫せざるといふ行は出來にくいのであらうと思はれる。二宮先生の父利右衛門は流石に二宮先生のお父さんたけあつて、なかなか立派な心掛を持つて居られた。恒産は不幸にして失はれたけれども、恒心は決して失はれなかつた。身外の寶はなくされたけれども、心の寶は決してなくされなかつた。茲に先生の父利右衛門が至誠の化身であつて、先生に生きた教訓を與へられた一例をあげて見やう。いつの年であつたか、父利右衛門が病氣にかゝり、醫者に見て貰つて幸になほつたけれども、藥の代にあつべき物がな。そこで漸く丹精してもとのやうになつた田地をうつて金貳兩を得られた。祖先傳來の田地を賣るは不幸であるが、醫者の藥代は拂はねばならぬと、醫者の許りに往つて、藥禮を拂はれた。すると醫者は、あなたの家は貧乏だ、藥代はいらぬ。一體どうして此の金を儲けたかといふ。利右衛門が田地を賣り拂つたのだと答へると、其の醫者がいふには、私は藥代を貰はなくても困りはしない。あなたは田地

がなければ一層困られるに違ひないのだから、此の金で田地を受けもどすがよい。私の方への禮は心配するな、利右衛門はどうしても置かうとする。と醫者がいふには、それではあなたの家が、富んで来たら其の時に貰はう。今は持つて歸るがよいと、いふので、利右衛門は、それではと半分の金を残して禮とし、半分を持つて歸られた。二宮先生は、お父さんの歸りが遅いので、病後であるから心配して、門に出て待つて居られた。するとお父さんは、何だか知らず、大喜びで歸られた。先生は其の喜びの譯をさかされると、醫者が誠に親切に義侠にいつて呉れるので、お前がたを養ふとが出来、それ故嬉しくてたまらないといはれた。

(未完)

幼稚園改善の方針

我國に於ける幼稚園改善の方針として、文部當局者の語る所なりと云ふものを見るに幼稚園の改良には、あらで實は幼稚園の退歩なるこそ可笑しけれ。由來我國の教育思想は深く獨逸の教育思想に負ふ

所あり従つて獨逸の風潮とし云へば一も二もなく之を摸倣せんとする傾きあるは誠に慨嘆に堪えざる次第にして斯くては我國の學術は何れの時が獨立の域に達す可き。但し其記事が果して文部當局の意見なりや否やは確かならず。其全文は左の如し。

從來幼稚園は、勞働者又は貧困者の幼児にして、家庭に於ては到底完全なる教育を受くる能はざる者を收容し、父兄に代りて之が教育に任する所にして、現在歐米各國に於ける幼稚園發達の状態を觀るに、何れも此趣旨に依つて、益々完全なる發達を遂げつゝあり、例せば獨逸に於ける四十餘ヶ所の國民幼稚園、佛國の母親學校、英米 キンダーガーデン等幾多の幼稚園は、悉く勞働者貧困者等、下流社會の兒童を以て充たされ、中流以上のものは稀れにも見る能はざるなり、這は全く上流社會の兒童は、其の家庭に於て充分教育を受け得るを以て、教育上常に困難を感じつゝある下層社會の兒童を、入園せしむるの必要より來れる、當然の結果に外ならず、斯くてこそ一般社會の兒童に對し、平等に完全なる教育を施すことを得るなり、然るに觀て、我國現下の幼稚園なるものを見るに、其の設立の趣旨を誤れるものゝみにて、凡て中流社會以上の兒童を以て満たされ、下層社會の兒童は、全く入園すべからざるもの、如き状態を示せり、而して上中流社會の兒童の多き結果は、概ね附添人を伴ふが故に、遂に幼稚園をして學校風を廢して家庭風に化せしめ、尙ほ進んで家族主義を發揮し、寧ろ幼児の擁護を主とするの傾向を生じつゝあり、然れば今後の幼稚園は、中流以上の兒童よりも寧ろ下層社會の兒童を成るべく多く收容し、慈善的に貧困者或は勞働者の兒童に、完全なる教育を施すべしと云ふに負ふ。

## 父兄に對する希望

如 柳 子

(12) 趣味を高尚にせよ

何事も令するところに従はずして好むところに従ふは一の眞理である。されば父兄としては高尚な趣味を持つて欲しい。運動會のあるときなどに、父兄は物見遊山と心得て、辨當や正宗の瓶を麗々しく提げて行くものがある。之を俗態といふので嫌ふべきことである。高尚な趣味を持つて近道は自然を愛することである。これは尤も金がかゝらぬことである。親が芝居藝者や飲食衣服や、見せものなど、劣れるもののが好きで、年中眞の見聞を披露して居るやうでは其の子供の品格がよくなれ様はない。此等の話は丸で止める譯にゆかぬとすれば、子供の聞かぬ場合にすることがよい。之に反して、山水風景、草木花鳥、美術品繪畫の類、讀書などいふやうな趣味の父兄にあれば、子供の趣味も自然高尚になるのである。

(13) 一家歩調を一にせよ

父親母親兄弟等凡て一家に起居するものは其の子供の教育に就ては歩調を一にせねばならぬ。父のいふこと、母のいふこと、違つて居り、兄のいふことを姉が批難するやうであると、子供は一番自慾に適するところに依頼して結局陰日向の行をすゝる、勿論虚言をいふやうにもなる。そこで一家の人は一ト口にいふグルにならねばならぬ。即ち歩調を一にせねばならぬ。父母兄弟のいふところ一致するに至つて、子供は信念を強くし、隨て感化されるのである。これは何でもなきとの様で随分大切な箇條である。一家のものが互に相批難し會ふやうでは子供の眞の教育は出来ないのである。

14 學校及び教師を貴べ

子供の最も信頼するものはいふまでもなく親である。尤も恐るゝものは先生である。然るに子供の信頼する親が學校のことをよくいはぬ、先生のことを悪くいふやうでは如何であるか、先生の前では頭を下げて、除で學校の悪口や先生の悪口をいふ、信頼する親の言ふことであるから子供は之

を眞に受けて、學校をそれ程有難く思はぬ、中には子供の言を取り上げ、親がある。人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかなで、子供にひいさして、子供を引き倒すといふことになる。されば親からして一層學校や先生に信賴し、之を貴んで見せれば子供は無論その風に感化されるものである。

(15) 祖父母に任せるな

昔から祖母の子は三百安いといふが、實際子女教育の中心は兩親にゐるので、祖父母は自己のよる年波の精神上身体上の老衰から、子供を終に甘やかす様になる、寒くなる祖父母自身が餘計に寒さを感じず。そこで孫も寒からうといつて祖父母と同じやうに厚着をさせる、すると子供は大迷惑である、活動心の満ちた子供は少し位衣服が薄くても何とも思はぬ。然るに老人と同じにされるといふので意氣地がなくなる譯である。されば祖父母に任すといふは、大概の場合に於て考へものである、世間には祖父母に權力があつて、若い夫婦に手は出させぬといふところも少くある

まい。併し我が子の教育は我が親でなければ理窟に合はない。此の點は如何に祖父母が權力があつても、任かせてはならぬことである。

(16) 子供の自動心を利用せよ

これは少しよろしい方の家庭に就て注文する。即ち子供に何事もさせぬ、手を下させぬといふことを止めるのである。成る丈け子供に用事をさせるのである。勞働神聖といふことを知らしめるのである。如何に手があつても足があつても、子供に自動せしめぬときは、其の極、精神上にも依賴心を起さしむる様になる。私の學校では良家の子女が多いのであるから、久しき以前から此の自動心の貧富高下によることではない、おしなべて子供に自動せしむる教育上の必要があるのでありますから、手のあるところでも、出来るだけは子供を働かせることを認めねばなりません。

(17) 復習の奨励

これは誰も解つて居ることであらうが、復習をうるさいとか邪魔とかいうて止めるに至つては沙汰

の限りである。成程或る場合にはさういふこともないとも限らぬ。併し無理にも復習時間を與へぬのは可愛想である。今日の學校は以前より容易になつた代りには色々の學科がふえて居る。爲めに學校で復習する時間といふのが殆どない。復習は是非家庭でやらねばならぬ。今日の兩親の中には明治二十年以後の教育を受けて居るものがある、即ち尋常高等といふ多少小學校組織の教育を受け居るものがある。兄や姉に至つては殆ど今と違ひのない教育を受けて居る。假名文字位の讀めぬものはない筈である。親が文字を知らぬから復習させることが出来ぬといふのは最早夢になつた様である。凡べての學科に就ていなくも重要な二三學科の復習は是非家庭でさせて貰ひたいものである。

(18) 通信簿のこと

通信簿は其の名の示すとほり學校では一々點檢する譯であるが、父兄の方も勿論一覽する必要がある。然るに之に捺印して一覽したる證據となす手續を怠るものが、私の學校にもある、一二人なれ

ば稀に忘れたものと解しても宜しいが比較的多くあるのは宜しくない、子弟の成績を氣にせぬものはないから、必ず一覽するであらうがツヒ忘れるのであるかも知らぬが、是は私の學校の話で、一般の學校は如何であるか、丸で見ないで其の儘學校へよこすものがあはしなないか、子供の成績はどの位出來て居るのか、又以前に比してよいのか下がつたのか少しも解らぬといふは、不熱心である子供は此の成績の通知などに頗る興味を持つて居る。親は子の出來榮を樂しみにして、前よりよければ褒める様にする、さすれば通信簿は眞の働きをするのである。これが取柄は一層丁寧に貰ひたいものである。

(19) 成績を見てやること

學校で書いた圖書習字、拵へた手工裁縫の點將た作文などは、常に子供が親に見せ、又親が進んで見るやうにしたいものである。それは一分か二分の時間しか費さなくも、子供は非常に振合になるもので、親の喜ぶ顔を見たい爲めに自然學校で勉強する。之に反して、一向何が出來たか分らぬ様



にすれば、學校で書くにも作るにも氣が乗らぬ、中には子供の不整理で失ひ又は無暗に道具や紙ばかり請求するものもあらう。併しこれは今の成績に注意するといふことで大分改めることが出来ると思ふ。

(20) 衛生の一斑

學校は多數の人の集合所である、不潔は尤も厭ふべきことで、不潔を防ぐ近道は度々入浴せしむることである。勿論冷水摩擦でもよいが、小學生徒にはチト無理な注文かも知れぬ、併し小供の入浴理髪などは山櫻一箱の代にも當らぬ、酒一合に當らぬ、買ひ喰ひ無駄遣ひを一切省いたなら毎日でなくとも隔日位に入浴させることが出来やうこれに次で爪、耳、鼻等の掃除を怠らぬやうにしたい、女兒などが奇麗に化粧して爪が長かつたり耳の中の黒いなどは屢々見受ける、斯かる點に注意して貰ひたいものである。衣服飲食物のことなどは別段言はぬがこれは注意して欲しい。次に運動させるといふことも必要であるが、運動といふて何も散歩する意味ではない、家の内外の拭掃

除の類でよろしい、運動といへば外に出ると心得るは間違ひで、家の身分に應じて勞働せしむることも運動になる、結局何をしても身体を動かせばよいので、これが爲めに金錢を費すは面白くない要するに今日は義務教育であつて家に不學の徒がなくなる様になつて居るから、父兄方の考も一歩進んだらうと思はれる。但し父兄會などへ出席する方が一層多くなり、學校のことなれば躍起となつて一ト肌脱いで貰ひたい、彼のお祭り騒動を見るのに、恰も狂せんばかりである。併しこれが子供の將來の爲めにどれ程の働があるか。此の狂せんばかりの熱心を學校の方に向けて貰ひたい。私の區は學校の自慢でございませといつた英國の或る寒村の例に倣ふやうにしたい。



# 幼兒の遊戯は如何に

指導す可きか (承前)

後藤ちとせ

## 遊戯と樂器

學校で用ゐる樂器といふとピアノ、オルガン、ヴァイオリンの三つですが幼稚園の遊戯室には出来る事ならピアノを用ゐるが宜しう御座います。何故と申しますと遊戯は愉快なものの活潑なものの面白さもので御座いますから之に伴ふ樂器もピアノの様な活潑なるもので笑ふが如く躍るが如きものが適當して居る扱て立派な樂器が出来たとしても彈奏者の巧拙如何に因りては折角の美音も其効をなさぬ事がありますから次に彈奏上の心得を少し御話いたしませう。

遊戯の際に於ける樂器使用上の心得

一、彈奏者は保育に必要な樂曲を暗んじ十分練習の上目よく幼兒等を管視し口よく之をうたひつゝ手なほ誤りなく彈奏し得る様でなくてはな

りません目は鍵盤を見るに奪はれ心は彈奏の誤りなからんことに汲々たる有様ではとても物になりません

十四

二、行進に用ゐる樂曲は單純で而も優美なるものを數多く練習し一行進中にも屢々面白さを彈かかへて變化を好む幼兒をして心の満足を得しむる様しなければなりません但し一の曲目より他曲にうつる際は必ず拍子に注意して歩調を亂させぬ様に致すべきです

三、遊嬉の動作の如何を考へ樂器の方も手加減をして一遊嬉中でも動作の活潑なところは樂器の方も活潑に舉止しとやかな部分は一方も穩かに弾く様に緩急時に應じて宜しきを得る様注意すべきです例へば蓮花の遊戯に於て歌の最後の一小節

「何時の間にかしげんだ」

「何時の間にか開いた」

四、又幼兒の方にも注意をして常に樂器の音の強

弱緩急に氣をつけさせ遊戯行進共によく之に合はさしむる様にし保育者は無言で居つても樂器の加減で或は早く或は緩かに或は活潑に或はやさしげに動作せしめ得る練習をさせるのが彼等の聴覺並に心的活動を敏捷にする上に効があります

五

樂器演奏者、遊戯指導者と二人で一組の遊戯を受持つ場合には豫め兩人の間によく打ち合せをして置き演奏者は常に補助の位置に立つて指導者の意を汲みとり指導者をして遺憾なく其思ふ所を實行させねばなりません然るに兩者間若しよく打合せがしてありませんと指導者が早く歩かせ様と思ふのに演奏者が緩かな弾き方をしたり早く弾き始めて呉れ、ばよいと思ふのに躊躇して見たりする其間に幼児の方は隙を生じて騒ぎ出すといふ事になりますから兩者の意志よく相疎通して間斷なく保育を進行させて幼児をして雑念を起させる暇のない様導かねばなりません

六、樂器を利用して諸般の合圖となしなるべく餘

計な説明命令をばよくが宜しう御座います例へば幼児と約束して或るマーチを弾き初むれば必ず一列より二列にうつるとかある唱歌を弾かれば直線より圓形に變るとか高音部の三間音を弾かれば何時でも遊戯を中止するとか或る曲を弾き出さるれば必ず眠る眞似をしようとかがいふが如きで、此方法を頭に用ゐますと復習の材料の際などには凡て樂器の合圖を用ゐる保母何等の命令説明の語を用ひずして幼児をして隨意に活動せしむることが出来ます

一、樂器の位置は前述の如く幼児全体を見渡し得る様に備へ置くべきです

指導遊戯に於ける保育者の心得  
一、幼児をしてなるべく束縛の下にあるの感を生じさしめざらんとが大事であります子供に向つて指揮命令すると少なく保母の口數が少なき程子供にとつては命令せられて居る感じが少ないほど幼児は活動し保母の口數が多い程幼児は器械的になるといふことがあります同じ蝶々の遊戯でも子供が進んで之をやらうといふ時と保母に

命ぜられてさせらるゝのとは子供の興味を感ずる上にとれ程の相違がありませう實に遊戯の生死のわけ目である遊嬉はどこまでも遊びたらずるべからず仕事たるべからず

二、保育者は始終目を全体の子供に注ぎ時の間もこの子供は今どうして居るかと思ふに注意しあやまれるものは手早くなしふぎ居るものは目つき態等手輕さ合圖によりて注意を促すべきで保育者の目の幼児全体にわたらずある一方に偏するのは悪戯幼児の生ずる主なる原因であるを忘れてはなりません

三、遊嬉の際には不必要なる言葉はなるべく之をさけ樂器其他の利用をして凡て保育を敏捷に進ましむる必要がありませう

四、説明や命令を出す際は必ず適當なる場合に於てしなれば殆んど無効なるがあります即ち幼児等の注意のまとまらぬ時或はさわぎ立てる折等は保育者がいくら大聲を發して物語るも一般幼児をして十分之を聞きとらしむる事が出来ず却つて保育者の品格を損ふのみですから此様な

場合には先づ唱歌をうたはせるとか靜な遊戯をさせるとかして心をまとめて後直ちに發言すべきです

一、遊嬉から他遊嬉にうつる折はなるべく敏活にうつして幼児をして雑談若しくは惡嬉等を始むる間暇を興へぬ様すべきです

六、特に一人或は數人の子供に他兒と異つた事をさせる際例へば猫鼠の遊嬉に於ける猫と鼠とが風車に於ける心とかかさよくの雀の如きものには先活潑にして好奇心あり進取的の氣象に當める幼児をして之に當らしめ其愉快な様子を賞め陰鬱不進取の子として己も亦彼の兒の愉快を得んとする氣を起さしむるが宜しう御座います

七、狭き室も用ゐる様によつては廣くつかふ事が出来ず廣しというても室内に於て遊嬉行進の練習をせしむるのでから保育者は常に室を廣くつかふに注意せねばなりません

八、遊戯指導者の動作は輕快且優美にして幼兒が自然これに倣うて美的に動作する様導かねばな

りませぬ

九、幼児にある動作を命ずる場合例へばこちらへ來なさいとか左を向けとかいふ際は言語によつて之に應ぜしむべく保育者の手を下して幼児をひつぱりたり押ししたり肩を押へて向きなほざしたりするとは誠によろしくない仕方で御座います幼児たとへ幼なくとも其人格を貴うんでやり決して物品扱ひに見える様な事があつてはなりません

十、一つの命令を出したなら必ず之に従はしむべく命令を出しておきながら其實行を十分させないなら却つて命令を何とも思はぬ悪習慣をつける事になりますから行はれ難いとは決して命令せず禁止せぬ様にすべし必要あり可能と見て出した命令ならどこまでも守らせねばなりません十一、遊戯の途中で幼児等が騒ぎ出してメチャクになつてしまつた場合には言葉での禁止制裁は此場合小供の耳に入らず只室内を不愉快な空氣に滿される計りですから保育者に機轉を利かして幼児の氣を轉ぜしむる方法例へば幼児等

の如く唱歌を弾き出して思はず知らず唱ふ氣にならしたり平素約束してある何かの合圖で漸く他の遊戯にうつらしむる等口で叱りつける事を避けて而も巧みに靜める方法をとらねばなりません

十二、個人性に注意して愚鈍な子にはなるべく猫鼠の如き敏捷な役に當らせ氣のきかぬ子には探物の探手の様な役をさせて其缺點を矯正する様つとめねばなりません

十三、特別な遊び手に(風車の心の如き役)何時もきまつた子供をさせるのは幼児をして不公平を思はしめ其兒には傲慢他兒には自暴自棄の念を起させる弊があつていけませんどの子でも保育者の命の下にすんぐ出て何事でもやれる様導かねばなりません

十四、右の場合若し因循でひとり出て何かするのがいやだといふ子がありましたら其は注意してまづよく出来る子にやらせたあとにか若しくは上手な世話の出来る他の子とか若しくは保母と一緒に其の役に當らせ追々獨りで出られる様に

鑿けるが宜しう御座います

十五、遊戯の際にはとかく塵か立ち易う御座います

から尤も換氣法に注意しなければなりません

十六、遊戯はなるべく美的にやらせるかよろしく

従つて保姆も外觀の美を粧ふ様な動作をつゝ

しまなければなりません

十七、競争に類した遊嬉には不清廉の行のなき様

注意させる事が必要です

十八、指導遊嬉をなすに當り保育者がまづ第一に

心掛くべき事は保育者自身子供となりて遊嬉を

心から愉快に思ふて居らねば樂しき遊嬉は見ら

れません大きい身体をして子供ばい事をするの

は馬鹿げて居るなど考へるのは保育の眞價や

貴重さを知らず淺果敢な事で御座います

十九、全一唱歌にも保育者の工夫によりては種々

の遊戯が作り出さるゝこと風車の遊嬉に數通り

あるが如くなすものが出来ますから幼児年齢の長

するに従ひ漸次複雑な遊戯形に變へ行くは全く

異なる遊嬉を受けざるよりも面白がることがあり

ます子供に尙甚だしき變化よりも或小部分の變

化が却つて喜ばる 場合が多いものです

二十、季節に相應じたる遊嬉をなさしむる事に

とめよ

地球の將來 (水面消滅の説)

船暈が厭やだからと言ふて航海を嫌ふ人は、  
暫らく待つが可い、今に船便に依らずして地  
球上何處にも到ることが出来る様になるとは  
或科學者が眞面目に説いた話だ星學者其他化  
學者の研究に由ると地球は將來火星と同一の  
運命に出遭ふに違ひない、火星を絶えず其表  
面より水分を蒸發して居るが故に曾て其大洋  
の底であつた土地は今に鬱々たる深林となつ  
て居り又曾て樹木の繁茂して居つた表は今に  
礫確たる砂地に變化したる如く、地球も又た  
水分蒸騰の盛なる爲に益々乾燥になつて來た  
から、此後數多の年月經過の後には今日車馬  
絡繹の都會も地層乾涸して水なく木なき沙漠  
となり、又今日難船衝突の災殃絶へざる洋海  
の底地も遠き將來に於て、菜園樹園に一變す  
るは疑ふべきことでないとの言だ。

# ○婦人百話



樂 天 子

## 四、美人の種類

美とは或る一區域の人類がその習慣上目に見て「あゝいゝ」「あゝ奇麗」と感ずる所のものにして、國に依り人種によりて一定せず、彼の支那の漢子治郎をして垂延を禁ぜざらしむる繩足は、到底我が意料の及ぶ所にあらずして、その醜や眞に嘔吐を催さしむべく、西人の尊重する蜂腰も、肥大を重んじて殊更衣服の間に物を入るゝバリ土人の目には、實に一顧の値もなかるべきなり。

亞非利加のエジプトなる、コプト人は目の大なるを美人として、目縁を黒く彩どり、ホツテントツト人は乳房の長く垂れ下るを美人とし、北亞米利

加のメキシコ邊に住するクロイインデヤンと稱する土人は、人工にて頭を斜に後に長からしめて、美人とし、南洋のニューギニー土人は、鼻の障子に棒を貫き、皮膚に傷をつけ、赤白の土を塗抹し齒を摺り減らして美人とし、ニューゼーランドの土人は、黒き直毛を態々縮らせ、面部一体に分身して美人を作り、南亞非利加のネグロは皮膚の黒きを貴び、黒きが上に尙ほ黒き油を塗り、眞黒にして光澤あるを美人となす、されば世界に於ける美人の特徴は種々様々のものにして、色白く、眼涼しく、身の細りたるは日本人の美人にして、世界の美人にあらざることを知るべきなり。

## 五、アイヌ婦人の文身

アイヌ人の文身は、男子には射術が上手になるといふ一種の迷信より、肩と手の大指の傍とに纏かばかり行はれ、婦人に於て最も盛に行はる、即ち額に一字形に施すもの、眉間にぼつちり施すもの、口の周圍に覆面を掛けたる如くに施すもの、腕よりの手の甲にかけて美しき模様を施すもの等にして既に明治十四年に政府より禁ぜられし所なるも、

彼等は北海道の山間に住するを以て今尚は黙許の姿にて盛に行はれ居るなり。文身の技師は一村一人位の割合にてこの業に従事す、その手術はマキリといふ小刀にて局所を縦横に傷つけ、多量の出血を樺の皮を焚きて「タモ」と稱する木を煮しめたる汁にて洗ひ、後に墨を塗り込むなり、母親は娘が年頃に至りし時は、親心の慈悲を以てこの恐ろしき裝飾を行ひ、娘も亦その時期の至るを待ち、好んでこれに従ひこそすれ、決して嫌惡するが如きことなしといふ、而してその手術を行ふときは、餘りの苦痛に堪へずして氣絶するもの往々ありと、風習とは實に恐ろしきものならずや。

アイヌの文身の起りに就て彼等に面白き傳説を存す、そは我々の祖先にもあらず、アイヌの祖先にもあらずる一種の別人種が、今の北海道へ退きし時、アイヌも亦此處に移り、自己の開明を誇つて先人種の未開を侮どり虐待せしかば、彼等はアイヌに逢ふことを好まず、常にかくれて物品の貿易をなしたり。

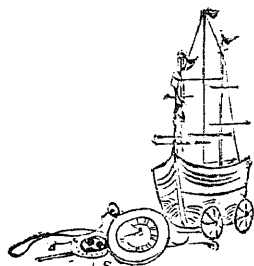
或時今の十勝に於て、アイヌの青年等寄り集ひ、彼等の性觀破す、屋外に物品を出して、その交換に來るを待ち、無理に小屋の中に引き入れて、その身体を檢査せり。然るに丁度若き婦人にして、口の周圍と腕とに美しき文身を發見せり依て其の故を正したるに、曰く男女鬚髻なければその區別をするためなりと、此の時アイヌは文身を美しき裝飾と感じ、後之れに眞似たるものなりといふ。

此の傳説中の人種は、所謂石器時代の人民にしてコロポツクルと稱する所のものなり、今日諸方より發見さるゝ所の石斧、石劍、石鏃、石棒など、何れも皆彼等の使用せし遺物なりとす、コロポツクルとはコロポツクル、即ちアイヌの語にて、露の下の人と稱する意味にして、アイヌの一地方にて、石器時代住民に命ぜし名稱なるが、内地人の語調に便ならしめんがため、坪井理學博士の命ぜし所なりとす、即ち北亞米利加の一部に住するエスキモー土人は、能くこの人種に類似せるものなりといふ。



## 玩具の撰び方

中村五六



子供本位でなくてはならぬ  
 子供は起て居る間は絶えず運動して居るものである  
 つて、其運動するには、何か物を持つて運動した  
 がるものである、故に家庭内に在る物は子供の眼  
 からは總て自分の玩具であると思つて居るので、  
 其子供の四周に置いてある手頃のものを以つて、  
 遊びたがるのである。子供の眼には價値が高い物  
 であるとか、又は家の必需品であるとか危険なも  
 のであるとか云ふ事は更に頓着無い、兎も角も手  
 に持つて遊ぶ事が出来れば、それで満足して居る

のである、故に昔は別段玩具なるものは無く、  
 家庭の用具を持つて、勝手に子供が遊んで居つた  
 のであらうが、それでは子供の爲にもならず、又  
 家の器具を勝手に子供に使用されては困ると云ふ  
 ので、玩具なるものが始めて出来たものと思ふの  
 である。そこで玩具は子供の運動を助ける爲め、  
 子供の自由に持ち遊ぶ爲めに、購ひ調べて與ふる  
 ものであるから、子供本位にして玩具を買はねば  
 ならぬ、所が今日家庭で買ひ與へる玩具は、多く  
 大人の心で買つて、大人の爲めに買ふか如き趣が  
 ある、故に買つて來ても床の間に備へて置いて、  
 自由に子供に使はさず、只見るものにして置くが  
 如き有様であるが、斯くては玩具の効用が無いと  
 思ふ。

玩具は手に持たるゝもの  
 ふもちやと云ふものは、手に持つて子供が遊ぶも  
 のを云ふのであるから、子供の手に持たれ得るも  
 ので無くては、玩具の性質に幾分か外れて居るの  
 である、故に玩具の種類で一番多くあるのは、子  
 供の手に持たるゝものである、玩具は五感に觸る

ものでありませんが、先づ手に觸るゝものであります。子供の運動を起す始りは、手に物を持つと云ふ事から始るのであります。子供の年齢に依つて運動の方法も異なりますから、玩具を興ふるにも、子供の年齢に相應しい物を興へなくてはなりません。子供の心になつて親が買つて興へなくてはなりません。子供の心はどんなものであるかと云ふ事は、兒童心理學等を研究せねば知りませんので、素人には子供の心は解りませんが、先づ年齢及び其性質に依つて、これならば適當であると云ふ考を持つて買ひ調へねばなりません。

危険が無く且つ博戯に類せざるもの、玩具を子供に相應して買ひ調へると云ふ事は、素人に、出來難い問題であるが、先づ第一注意せねばならぬのは、危険の恐れが無いと云ふものを選ぶのである。ブリキ細工の如きは毀れ易いのみならず、危険が最も多い、又色でも有毒なものを用ゐたるものがある、子供の間は善く口に入るものであるから、染料に對しても深く注意せねばならぬ、又博奕に類するものが玩具の中には往々ある、

勝負を友人同志相争うて遊ぶと云ふ風な事は、子供の精神上最も惡感化を及ぼすものであるから、之を求めぬやうにしないでならぬ、又毀れ易い物で無いものを選びが善いが、毀れても之れが部分的であつて、毀れたなりに玩具の性質を帯びて居りさへすれば善いと思ふ、又必しも自動的のものには必要でない、バネで進む如きものよりは、自から、動かして遊ぶと云ふものを子供は樂しむものである。漁車がバネ仕掛で自然に動くよりは、船を自分で動かして遊ぶ方が子供は喜ぶのである、又價の高い物と安い物とは、子供には何等の關係が無い、安くて子供が最も喜ぶものが一番よいのである。

幼稚園で使用する玩具と、家庭で使用する玩具とは、其種類が違つて居る。幼稚園では、大衆の子供が平等に取扱ふものでなくてはならぬ。



# 嬰兒の哺育

R. H. 生



子供を有たる、婦人方で、必ず心得置かるべき事の數多ある中にも、分けて大切なるは子供の病氣の事でありませう。實際醫學上から見れば病氣と名づくべきものではなくて、普通の子供が極く侵され易い病徵がありませう、之は一般の婦人方が普通經驗せらるるところでありませう。してこの病徵たるや決して本當の病氣ではなくて、一時の發作に過ぎず、三四時間も経てば全く恢復して何の苦みをも感じないやうになるものですから、母たる婦人は豫て此事を御承知になつて居れば決して驚

きなざるには及びません。如何に健康な小兒でも此種の苦痛に侵されたいものは少ない位であります。乳のみ兒は其母の健康状態によりて、大に其健康及び發育に影響せらるゝものであります。幸にして母たる婦人が温和で、自制力が強く、規律的で、過度に働かず、飲食に注意し、物に怒らず、身體頗る健康でありますならば自然に其子の健康も勝れ、發育も充分に理想的なることが出来、性質も至つて順良に保持せらるゝものであります。之に反して母たる婦人にして不幸にも性質がいぢけ、心に平和がなく身體の働作其度を失し、不規則にして起臥時なく、飲食に攝制なく、健康一向に勝れない場合には、其胸に抱かれ其乳を飲む小兒も、従つて其母より何の元氣も與へらるゝことが出来ず、健康も勝れず、發育も充分なることが出来せん。要するに小兒の健康は一に其母の健康状態の如何によるものであります。小兒に乳を飲まさうとするに當りて母たる婦人が餘りに疲れて居るか、餘りに興奮されて居るやう

な場合には暫く見合せた方がよい、若しそんな場合に常の如く乳を飲ませますならば、其結果として往々其小兒を意地悪くなし、或は熱發させることがあります。母親が怒つて居る時に其乳を小兒に飲ますれば小兒は大變な病氣になる事があり、時としては其爲めに死ぬことさへもあります。少し大袈裟な言ひ振りではあるが、若し母親が其心柔和でなく、身體強健でないならば直ちに其小兒の神經に響きを與へて其發育を害し、健康を損ふことになりませう。

身體強健にして發育其宜しきを得たる嬰兒は、生後數週間は一晝夜二十四時間の中二十時間だけは眠つて過むし、其睡眠中は極く静かで自然であります。而して残りし四時間の中に乳を飲み、手足を延べ、發育成長するものであります。

生後數週間は嬰兒が乳を飲みながら眠るやうな事がありますから、日經ちの後の様に規則正しく飲ませることが出来ませぬ。然し決して御心配に及びませぬ、睡眠中は其胃が決して擴張しませんから乳を飲むことが不規則になつても、必ず一定量

以外に飲み過して胃を悪くするやうなことはありませぬ。生れたての嬰兒の胃には三四勺より多く容ることが出来ませぬから、乳を饜に容れて飲ませるやうな場合に(主として牛乳などは、毎度此分量で規則正しく與へねばなりません。そして其適當分量が自然に規則正しくなり、之が習慣となれば、もう其分量以上には分泌されないやうになるものであります。

嬰兒の肝臟は、其體の大きさ及び他の諸器關の大きさに比し甚だしく大きいものであるから、右側の乳房で乳を飲まして居る時に小兒が苦痛を覺える様な事が屢々あります。之れは肝臟の重量が一杯になつてゐる胃を壓下するによりて此苦痛を與へるのであります。故に右側の乳房で飲ました後で小兒が騒ぎ出す様な事のある場合には、右の腕の下に足をあてて、左側の乳房で飲ませるやうにし、臥かせる時には右側を下にすれば其の苦痛を治すことが出来ます。

嬰兒時代には病氣の徴候によりて起る精神上の苦痛と、肉體上の苦痛とは少しも關係を有つて居ら

せん。休むにも時なく、眠ることも出来ず、哭き叫び痙攣性の感激によりて酷く苦められて居りながら、一晝夜少しも其何故たるやの徴候さへ見へない事もありません。また強健なる小兒に於ては苛烈しき神經的感激が、恰も普通の病氣にでも侵されたかと思はるゝ様な徴候を呈する事も往々あります。之等の事は母親たるべき婦人が豫て心得置くべき事でありませぬ。

小兒は元來大人よりも體温が高いので、少し病氣にでも罹ればズツと熱が高まるから、豫て之を知らない人々は小兒が大した病氣にでもかゝつたかのやうに驚かざるゝものであります。小兒の時には些細な病氣にかゝつても非常な體温が高まることがありませぬから、そんなに驚くには及びませぬ。齒の生へる間、殊に齒が齧を破つて出る時には、大抵華氏の百四度或は百五度位の熱が出ます。三四歳位の強健な小兒は、毎朝九十九度位の熱が出るものが往々あります。幼兒の脈は睡眠中にあらざれば殆んど計ることが出来ませぬ。また小兒は大人よりも呼吸の度が速いことを知ら

ねばなりません。二歳以下の小兒は一分間に三十回の呼吸を致します。即ち大人よりもズツ多いのであります。尙少しにても不快になれば更に呼吸の度が速められて來ます。

舌が白くなるのは通常發熱か、消化不良か、或は苛烈しき刺戟の徴であり、舌が紅く、乾いて、熱くなるのは口や胃や喉衝の徴であります。

小兒が烈しき熱に侵さるゝのは大抵は食ひ過ぎか消化不良のものを食つた結果であります。

私の經驗によれば消化の良い食物を適度に與へられ、休息を充分にする小兒は、齒が生へる時にもサシテ苦痛を感じませぬ。稀に苦痛を感じることもありまして至つて輕い痛みであります。齒が生へる時には必ず熱が發するものとは限りませぬ。齒の生へる時分は小兒の腦が著しく啓發されつゝある時でありまして、胃が適當に其作用をなさず、或はいやが上にも無茶につき込まれると云ふ風である、其結果腦及び各々組織が刺戟を受けて遂に熱を發するやうになるのであります。普通大人の腦は全身の大きさの四十乃至五十分の一で

ありますが、齒が生へ始むる頃の小児の腦は、其體の大きさの八分の一と云ふ比でありますから、些細な攪亂でも直ぐに心身に刺戟を與へるものであります。

食べた物を吐く事は、若しそれが長く積つたものでなければ單に體内の小變化に過ぎませぬ。通常過度に積み込まれた胃の重荷を軽減して居るか、或はいさせさまきて食ひ込んだ食物が胃の中で無茶苦茶に攪亂されたので、それと外へ出して居るのであります。また餘りひどく小兒を揺り動かしますと胃の中を攪亂すばかりでなく、腦を震盪して甚だしく之を刺戟しますから、ひどくは之を揺らないやうにしなければなりません。

食せ過ぎたとか、不良の物を食はしたとか、又は齒が生へかゝつて居るとかを思ひ出す間もあらず、急に發疹の出る事があります。

若しや小兒が瘦せ衰へて青白く、大きくもならないやうな場合がありますならば、それは其食物が同化して居ないのでありますから、早速其原因に注意せねばなりません。そして早速其食物を可良な

ものと變へねばなりません。小児の皮膚が擦り剥けるのは、通常手巾を取換へる時に能く乾いて居なかつた爲めか、または濕つた手巾を餘り長く換へてやらなかつた爲めかであります。消化不良も皮膚の剥ける原因となり、之を治するには食物を變へるか、または適當の藥を與へなければなりません。

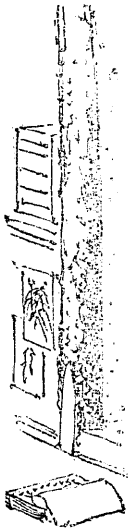
嬰兒は何か原因なしには決して泣きませぬ、無論母か子守りか側に付いて居て貰いたい爲めに泣くこともありますが、其哭き様により、病氣の爲めか、氣持の悪い爲め苦しんで哭くのかは容易く聞き分ける事が出来ます。

嬰兒は常に多量の水分と新鮮なる空氣とを要します、故に之が保育の任に當るものは毎日適度に之等を與へねばなりません。また缺乏を感じた時には嬰兒の方で哭き叫んで其要求の意を訴へます。嬰兒は毎日戸外に連れ出して心地よげなる新鮮の空氣を呼吸せしめ、また屢々戸外で眠らすこともせねばなりません。私の知つて居る一人の小兒は其初め至つて微弱な體であつたにもかゝらず、

常に乳母車に乗せられ、體を暖く包まれて、毎日二回宛睡眠の爲めに玄關の外に寝かされて居たところか、間もなく大層丈夫な體となりました。無論上には風のあたらないやうに軽い被覆をせられて居ました。

牛乳で育てられる嬰兒が秘結する事がある場合には其乳に食鹽を一滴み入れて飲ますれば往々全治する事があります。

嬰兒には何時も充分暖かなやうに着せて置かねばなりませぬ。さりして着せ過ぎてはいけない。何時も其着物は能く乾いて着心よきやうにして置かねばなりません。また食物を適度に與へ、其心身を攪亂しないやうにし、其睡眠を妨げないやうにせねばなりません。斯くしてこそ其報いとして小兒の心も健康も共に勝れて日増しに幸福と愉快を増し加へらるゝことが出來ます。



### 婦人と家政

桑竹孝太郎



男女兩性は互に異なる特長と天職とを有して居り又有所すべきであるは云ふまでもない。此點に就いて希臘の哲學者プラトンの想像説は、男女兩性調和の必要を最も能く説明せる話と見られる。其説に依れば原始の時に於ける人類は、男子と女子とは分たれずして、男性女性の兩部共に一人に合體し、一人にて男兼女たり、夫兼婦たるものなりしが、斯く兩部が混和結合して一體を成せるが爲に、兩性の一致完全にして、従つて人類は莫大なる幸

福を享け、餘りに幸福なりしより傲慢無禮となり、  
 終に諸神の命を奉せしめて、之に對し叛逆するに  
 至れり。是に於てジュピター神は人類の大膽なる  
 を罰せんとしたるが、其方法は、男女兩性の合體  
 を解きて互に離別せしむるに如かずと爲し、即ち  
 兩性の完全なる結合は神罰を蒙りて破られ、茲に  
 始めて男女は別人として生存する事となれり。然  
 るに人類は分離後に於ても、戀々として合體の當  
 時に享けたる幸福を忘るゝ能はず、引離されたる  
 各半部は、互に他の半部を求めて止む時なく、幸  
 に適良なる半部と相逢ふときは、至大の同好同情  
 を以て、何時までも琴瑟の和を保つべきなれども、  
 半部の選擇を誤るときは、一旦の結合も忽ち離別  
 となり、更に適良なる他の半部を搜索するの必要  
 を生ずるに至ると云ふてある。是は男女の起源、  
 及び婚姻に關する哲學者の説であるが、吾人は之  
 を以て男女分業協力の必要を説明せる言葉として  
 大に趣味ありと考ふるのである。  
 凡そ社會的の經營は、分業協力の結果ならざるは  
 なきも、殊に男女の分業協力は最も自然にして且

つ最も緊要なるものである。若し男子が女化し、  
 又は女子が男化すれば、其分業協力の必要は薄弱  
 となり、之より生ずる利益も僅少となるべく、之  
 に反して男女が互に益々其特長を發達せしむれ  
 ば、其分業協力は益々偉大となり、男女を綜合  
 せしより生ずる利益は愈々偉大となり、男女を綜合  
 せる人類は益々完全とならうと思ふ。而して男女  
 の分業協力が如何に行はるゝかは、古今東西、時  
 と所とに従ひ、又社會の階級に従ひ、互に同じか  
 らざるは、勿論なれども、要するに、男は外を營  
 む、女は内を整ふるを以て分業の基礎とし、此分  
 業十分に行はるゝを以て文明の状態と爲すべきで  
 ある。故に家庭と稱する小帝國に於ける財政、衛  
 生、教育、警察を施行し、常に平和ならしめ、快  
 樂ならしめ、健康ならしめ、規律あらしむるは、  
 主として婦人の任すべき天職にして、婦人をして  
 此天職を盡さしめんには、資金と時間とが無くて  
 はならぬことは論を俟たない。  
 先づ時間に就いて一言すれば、交際の時間を利  
 用し節約するを以て甚だ緊要と考へる。時を親戚



又は朋友と相會して、談話、智識、經驗を交換し、以て益々懇親を厚くするは、互に幸福を増加する所以にて、斯かる交際を缺かば、人間の人間たるかひ無しともいふべし。而して之を行ふには、雙方に差支なきやう豫じめ日時を約し、相會しては、十分に歡を盡し、遺憾なく和樂の目的を達しなればならぬ。其他臨時の往來は、必ず要務要談ある場合に限り、既に要務要談を了らば、訪客は直ちに去るべく、主人は安りに之を引留むべきでない。斯くて交際上の時間を飽くまで利用すると共に飽くまで節約するは、最も注意して務むべき事であらう。次に頗る困難なる問題は女子の職業と家庭との關係である。吾人は茲に女子が高等なる學問藝術を研修する場合は云ふにわらずして、生計上の必要より、工場其他の勞働に服する場合を云ふのである。未婚の女子にして此境遇に在れば、他日一家の主婦たるべき良質を損し、邪惡の道に陥る危険が甚だ尠くない。既婚の女子にして此境遇に在れば、家庭の整理及び子供の教養に充つべき時間の大半を犠牲としなければならぬ。是は各

國共に、經濟上、社會上、道徳上の重大問題と爲す所であつて、實に現代のみならず、遠く次代子孫の禍福にも響影する次第である。故に女子が勞動に従事するは止むを得ずとするも、成るべく其方法を改善し、其弊害を矯正することは極めて緊要であつて、學者や政治家が此問題の解決に心を盡すべきは勿論であるが、吾人は婦人界の有識者が大に此問題に注意あらんを深く希望するのである。

又家庭の行政費を供給するは専ら男子の任務とする所である。故に男子は、家長とし、資金供給者として、自然家政に對し、命令、認可、監督の權を有するのである。然れども實際は、殆ど此權の施行を要せざる程にあらざれば、家政は美なりと云ふことが出來ぬ。若し男子にして家政に對し細密の干渉を加ふるあらんか、こは、適者に任ずる能はざるの罪、夫にありとするも、將た家政を料理する能はざるの咎、婦にありとするも、何れにしても到底圓滿なる家庭の幸福を擧ぐる能はざるべしと思ふ。故に双方共に最も戒めて之を矯正す

る必要である。若し婦にして家庭の宰相たるに適せば、夫は内顧する所なく、一に自己の事業に専心努力することが出来る。徒らに無用の干渉を試むるは、男女の特長に従ひ、互に業を分ち力を協はす所以であるまい。而して家庭の經濟を正すには、明瞭なる家庭簿記を以てするより善きはなく、決して一時の心算として紙片等に書附くる如き事を爲べからず、必ず適當なる帳簿を備へ、一切の收支及び其摘要を之に記入すべきである。凡そ如何なる事件も、收支に關聯せざるものなれば、此の帳簿を保存せば、最も貴重なる家庭歴史となり、且つ物價の高低、其他生活状態の變遷に關し、經濟上、社會上の研究に甚だ有益なる材料を供給するを得るは、吾人の信じて疑はざる所である。若し主婦にして一應經濟學の理をも調べ、家庭經濟を行ふに當り、常に理論と實際とを對照せば、最も妙味多かるべしと思ふ。又家庭經濟に於ても、年々收支大體の豫算を立つること極めて緊要にて、豫算超過の支出は固く之を避け、毎年必ず多少の剩餘を蓄積する事としたなら

ば、家庭は歳を遡うて益々富裕となり、延いて國家富強の基となるに相違ない。ジェニター神が一體なりし男女を解きて兩體の男女と爲したるも、人類の不幸なるに以て必ずしも然らずである。此分離の爲に、男女何れも十分に其特長を發揮することが出来る。故に互に良匹好偶を得て結合するときは、一層完全なる人類を形成し得るに相違ない。而して其分業協力の結果は、求めずして自ら生じ來るべしと信ずる。



## ● 獨逸に於ける學生

### 給食法

(ベルリン市最近調査の報告)

▲ベルリン市役場に於ては、公立小學校生徒中、貧兒童に對し學校に於て給食しつゝあるが、尙ほ其の給食法不完全なるを認め、市の教育課長ヒツセル氏及市會議員其他學務委員數名をして、獨逸國內の都府及びオースタリヤの一二の都府に出張を命じ、各地に於ける貧兒童給食の狀況を調査せしめたるが其報告に據る各地の貧兒給食法を摘譯せん。以て數名の調査委員は左の如き調査條件を有ちたり。

- (一)、貧兒給食は慈善會若くは市役場に於ての何れがなすか。
- (二)、給食の經費は如何にして得るか。
- (三)、給食は年中絶えずなすか、又は冬のみか。
- (四)、給食すべき生徒を如何に選定するか。
- (五)、給食を受けたる生徒の父兄が一部分、又は全部の食費を出すべきか。
- (六)、如何なる食物を給すべきか。
- (七)、如何に調理すべきか。
- (八)、如何なる場所に於て給食するか。
- (九)、經費の總額は如何。

(十)、小學兒童中にて給食を受くる割合如何。右に對する調査報告の概要。

一、ドレスデン、に於ては二個所の小學生徒給食組合あり、此所は富豪の慈善金に據つて經營せらるゝものにして、唯冬季間のみ温き食物を給す、然れども經費に尙ほ不足を感ずるを以て市は之に六千九百五拾マルクを補助せり、此組合に於ては最も營養分に富みたるスープ及びパンを與へ居れり、昨年度に與へたるスープの皿數六萬二千〇五十一皿にして一皿の經費は九乃至十ペニシ(一ペニシ約我五厘)なり、給食所は學校内に於てし、組合は市の補助金以外に七千二百七拾マルクを富豪の寄附金に仰ぎたり、如何なる兒童を貧民の兒童と做すかは容易に決し得べからざる大問題なり、故に先づ教員をして給食せしむべきや否やを調査せしめ、然る後市役場に於て再び之を調査し、之が結果に依りて給食すべきや否やを決せり。

二、ウインナ、同市に於ては小學兒童給食組合は既に二十年前より成立し、千九百七年に於ては組合員より之が爲に據出せし金額は二千五百四十八クローネ(一クローネは約二マルク)にして、組合に於ては年々必要金の増加を來し、富籤、演藝會及び講演會等を催ふして是等の收入を以て給食

組合經費の基金を造るに至れり、斯くして今や其基金は三十萬クローネに達し、尙ほ之以外同市は年々十萬クローネを支出せり、斯の如く多大の收入あるも従つて支出も又多し。  
千九百七年(昨年)に於ける、

收入 クローネ 支出 クローネ

一三七、五四九 一二五、四七二

にして給食は唯冬季間のみとし、一日平均一萬五十一人に給食する割合なり、同市に於ては特別な食事を調理する爲に市内所々に之が調理所を設け、毎日午前十一時半より十二時迄の間に於て、食事を學校の運動場に運び、教員の監督の下に給食せり、今回調査の都市中本市は最も廣大なる規模にて、又其給食法も完備せるもの、如し。

三、ニュルンベルグ、本市は慈善會ありて冬季極寒中給食すれども、尙ほ其方法幼稚たるを免れず而して本市は貧民數甚だ多きに拘はらず組合の活動見るべきものなきを以つて、市も又敢て之が補助をなさず、故に經費の如きも一年僅々五百四十二マルクにして、給食を受くる兒童は五百十七人のみなり。

四、フランクフルト、アンマイン、本市は近來朝食を給與するの外、昨年冬季に於ては八十五日間牛乳を與へたり、本市の此經營又慈善組合の下に

行はれ、昨年の支出は二萬二千七百八十九マルクにして其内市の補助金は六千六百マルク、給食を受けし生徒數は千九百七十三人なり。

給食と稱するも本市は牛乳のみを與ふるを以て手數を要せず、其方法簡便にして且能く行は渡れり、給食法は學校教員及び校長が貧民と認めたる生徒に對し、校内に於て之を與ふるの方法なり。

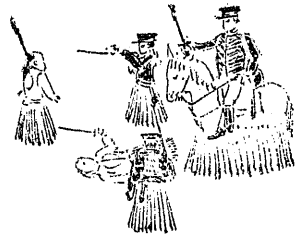
五、ストラスブルグ、本市は常に貧民のみならず比較的病弱なる兒童に對しては悉く無料給食せり此市の給食組合は市の學校衛生組合の主催せるものにして、昨年給食したる牛乳二十四萬千七百九十杯(一杯二分の一リットル)にして之が經費は八千マルクなり、斯く本市も牛乳のみなるが、近頃に至り肉類をも與ふるの必要を感じたるも、經費の都合上今直に實行する能はずと云ふ。

六、ストットガルト、アウグスブルグ、ミュンヘン、ハンノーベル、ハンブルグ等の市に於ては、何れも小學兒童にして營養不良の爲め、通學はすれども不良の成績を現す如き兒童に對して、各市とも慈善組合より給食の方法を定め、市も又相當の補助を與へ居れり。

特にバハリアのミュンヘン等に於ては、此給食組合の事業に對し官民俱に力を致せるの結果、貧兒教育の上に多大の好成绩を示すに至れりと云ふ。

# お伽童話

## 鈍太郎



とよ子

昔々。或大戦がおしまいになつた時に。多くの兵士達は皆家へ歸ることを許されて、夫々お給金やらお褒美やら戴きました。其中に鈍太郎と云ふ一人の兵士は一包の軍用パンと一錢銅貨四つとを貰つて自分の故郷に歸ることになりました。

此鈍太郎は家にお父さんが居るでもお母さんが居るでもなく、全くの一人暮しでありましたので別段故郷に歸つた處で面白いこともありませんから寧のこと世界中を廻はつて方々を見物しようと云

ふ氣になつて足の向ふに任せて先づ東の方へと出掛けて参りました。一包の軍用パンと大枚四錢のお錢で世界中が廻はれませうか誠にあぶないものですが鈍太郎にはそんなことは一寸もわかりませんでした。何にしる、呑氣な人で、そして足の達者な性でしたから、足に任せてすたくと東の方のみ指して彼是五六里も來たらうと思ふ頃、とある野原へと出ました。折柄春の始めのことで、蓮花やたんぽぽがあちこちに咲き亂れて空には奇麗な鳥が春の歌を唱つて居りました。鈍太郎は道傍の木に根に腰打掛けて麗かな春の景色に見とれて居りますと頓がて後から

「若し、兵士さん。〜」と呼ぶものがあります。何用かと思つて振りかへつて見れば、見ると穢らしい一人の乞食が腰を屈めて

「若し、兵士さん、私は昨日からまだお飯も食へません、何うぞ何でも宜しう御座いますから御恵み下さいまし」と申しました。

根がお人好しの鈍太郎は早速承知して

「それは、御氣の毒なことだ。困るときは誰

も同じことだから、それぢや是でも食べなさい。そして茲に四錢あるから此中の一錢をお前に上げやう」と云つて軍用パン一つと一錢銅貨一つとを遣りました。頓がて茲を出立して一二里ばかりも來だかと思ふ頃向ふから又一人の乞食が參りました。そして

「若し、兵士さん、私は昨日からお飯も戴きませぬ、何うぞ何でも宜しう御座いますからお恵み下さいまし。」と云ひました。鈍太郎はまた先つきの様に

「それは、御氣の毒なことだ。困るときは誰も同じことだから、それぢや是でも食べなさい。そして茲に三錢あるから此中の一錢を上げやう」と云つてパント一錢銅貨一つとを遣りました。乞食は

「有難う御座います。御蔭様で生命が援かります！」と云つて何處かへ行つてしまつたと思ふと、また向ふから一人の乞食がやつて參りました。そして前の通りに

「若し、兵士さん、私は昨日からまだ御飯

も戴きませぬ。何うぞ、何んでも宜しう御座いますから、御恵み下さいまし。」と申ました。

鈍太郎は別段いやな顔もせず、例の通りの調子で

「それは、御氣の毒なことだ。困るときは誰も同じことだから、それぢやこれでもお食べなさい。そして茲に二錢あるから、此中の一錢を上げやう」と云つてまたパンと一錢とを遣つてしまひました。残る所は軍用パン一つと銅貨一錢があるさうです。

鈍太郎は道傍の石の上に腰を掛けて残つたパンを噛ちりながら、

「さて今夜は何處へ宿まろうか」と考へて居ります。後から

「ヤ、君は何處へ行んだい。」と云ふものがあり、誰かしらと思つて振り返つて見ると、矢張自分と同じ様な服装をした同じ兵士さんの一人でありました。

「ヤ、是はい、道連が出来た。僕は是から世界中を旅して歩うと思ふのだが君も行ないか？」と云ふと

兵「それは面白いな、けれど僕は用があるから一  
所には行かれないよ。けれど今夜は同じ宿屋へ  
宿まらう。そして手柄話でもしようではない  
か」と云ひますので鈍太郎も承知して、とある  
村はづれの小さな宿屋に止まりました。ところが  
鈍太郎は何にも彼にも銅貨一錢切りありませんの  
で御飯も何も食べられませんでした。困つて居ります  
と、も一人の兵士は懐から軍用パン三と銅貨を三  
錢出して是で兎も角も夕飯を濟して仕舞ました。  
其晩は始めての旅で大分疲れましたから例もより  
は少し早く床に入つて休みました。さて朝になつ  
て鈍太郎は早く目を覺して首を上げて見ますと今  
一人の兵士は最う起きたと見えて床も何もありま  
せんでした。

鈍「オヤ、大變早く起きたんだナア、夫れは然う  
と最う何時かしら？」と起上つて柱の上の時計  
を見ると今丁度四時を打つた時です。宿屋ではま  
だ下女も誰も起きては居ない様です。夫れにして  
は今一人の兵士は何うしたのだらうと鈍太郎は起  
きて其處等見廻はしますと机の上一枚の紙切が

ありました。何だらうと手に取つて見ると紙には  
鉛筆で左の如く書いてありました。

「心好き鈍太郎よ。三個の軍用パンと三錢の銅貨  
は返したるぞ。乞食より、  
と書いてありました。鈍太郎は驚いて、さては昨  
日の乞食は實は、皆乞食ではなくて神様の御使で  
あつたのかと始めて氣が付きました。

さて夜も明けましたので鈍太郎は此宿屋を出立し  
てます。東の方へと志して歩いて來ました。す  
ると向ふから一人の百姓男が車に山の様に荷を積  
んで來ました。頓がて道悪の中へ引き込んでしま  
つて何うしても出られませぬ。鈍太郎は之を見て  
急いで行つて一生懸命に後押をして漸くのことと  
道の善い所に押し出しました。百姓男は大層悦ん  
で二錢銅貨一つを呉れました。鈍太郎は之を持つ  
て町へ行つて宿屋へ宿まらうと思つて急いで参り  
ますと自分よりは少し先に一人の老人が見も弱け  
に杖ついて行くのがありました。鈍太は話し相手  
になる積りで早速で後から途ひついて

鈍「若し、お老人！何方へ御出掛けで御座い

ますか?」と尋ねますと

「コレハ、兵士さん、私は是から世界中を見物して歩かうと思ふのだが、お前さんは何處へ行くのかね」

「私も實は是から世界中見物して歩うと思ふのです」と此處で相談が極まつて是から二人一所に行くことになりました。頓がて町に出ましたので或小さな宿屋へ宿まつて一錢で御飯を買ひ一錢で御菜を買つて二人で食べました。

さて翌日は鈍太郎は一文もお錢を持つて居ません所が老人も生憎すつかりお錢を費つてしまつた所なので二人とも今夜は宿屋へ宿ることが出来ません。鈍太郎は心配してそつと

「お祖父さん、私はもうお錢がないから今夜は宿屋へは宿まれないよ」と云ひますとお老爺さんは平氣なもので

「ナニ、心配することは無いよ、私は少し醫者の真似が出来からね、これで方々へ宿めて貰ふことにしようよ。」と云ひながらだん／＼と東の方へ來ますと或村はづれの百姓家の中から頻り

に子供の泣き聲がします。鈍太郎は何事かと思ふて門口から窺ひますと一人の子供が今しも床の上に臥て居て何か大層苦んで居る様子です。鈍太は急に思ひ付いたとあるものでつと家の中へ入つて「若しく、お女房さん大層子供が苦んで居るではないか、私の道連のお老爺さんはお醫者さんだが頼のんで上げ様か」と云ひますとお女房さんは大悦びで

「それは、有難う御座います。夫れでは何うか宜しく願ひます」と申しますのでお老爺さんは家の中に入り子供の脈を探つたり舌を見たりして頓がて持つて居た小さな鞆の中から何だか白い粉薬を少しばかり出して飲ませました。スルト見て居る中に今迄苦しんで居た子供の病氣はけろりと治つてしまひましたので家中の人は大變に喜んで今夜は是非此家に御宿り下さいと云ふので仕合せよしと二人は此家に宿ることに致しました。さて翌日の朝になつて二人は此家を出掛け様と云ふ時此家の主人は、何か御禮の印に差上げたいと云ひましたが無欲な老人は何も求ませんでした。



主人「それでは甚はだ輕少なものです。小羊を一匹差上げますから之れは是非御連れ下さいまし」と云つて奇麗な眞白な小羊を一匹呉れました。老人は「それではない」と云つて受けませんでした。鈍太は、「夫れでは私がついて行かうと云つて懐から細繩を出して小羊の首に縛つて連れ出しました。斯うしてだん／＼東へ／＼と歩いて来ました。所が此日は何う道に迷つたものか行けば行く程山深く行く様な處ばかりで一寸も人里らしい所に來られませんかでした。二人は仕方がありませんから、ある岩かげの處に木の葉を集めて寢床を造しらへ木の枝を集めて焚き火をして此火で小羊の御料理をしてお甘しい焼肉の御馳走になりました。が不思議なことには老人は一口も肉を食べませんでした。そして鈍太の食べて居る間は其處等をぶら／＼と散歩して居りました。

二人が木の葉の寢床の中から眼を覺した頃は太陽は高く輝いて小鳥はあちこちに囀り春の花は時を得顔に赤や青や黄や白や色々の花を咲かせて居りました。

二人は大急ぎで仕度して又も東の方へと旅立ちました。だん／＼行くと今度は或王様の都へと來ました。スルト向ふの道角に大勢人立がして何か事のある様子ですから二人は急いで行つて見ますと其處には王様の御令布が貼り出してあるのです。何事かと思ふて讀んで見ると此王様の大事なお姫様が今大層な重い病氣に掛つて居て今にも死にそうなのだそうです。夫れで誰れでも此お姫様の病氣を治すものがあるなら大急ぎで御殿迄來い。褒美は何でも望のものを遣ると云ふことでした。

鈍太は小躍して悦んでお老爺さんを急がせて王様の御殿へ行くことにしました。ところが此老人は足が弱いので中々歩けません。急がせれば急がす程何だか悠々と歩いて居る様で、僅か十丁か廿丁の道を行くのにも何でも四五時間ばかり掛りました。鈍太は氣が氣ではなく若しも御殿に行き着かない中にお姫様が死んで仕舞つては大變だからと頻りに「急いで／＼と申しました。が老人は一向平氣で老死んだつて、いゝぢやあないか」と云ふ調子で悠々としたものでした。頓がて王様の御殿に迄來

ましたので鈍太は急いで此事を御家來に申上げる  
と御家來は惜しいことをしたと云ふ様な顔付で

「もう用はないよ、お姫様は今しがた御崩れに

なつたから」と云ふので鈍太はがつかりして、

鈍「夫れだから云はないこつちやない。人が急い

で〜と云ふのにさつぱり平氣で歩いて居るも

のだから間に合はなかつた。お蔭で今夜は立派

な御殿に宿まれる所であつたのに宿りそこなつ

て仕舞つた」と頻りにぶう〜云ひましたが老

人は相變らず平氣の平左右衛門で一向何とも思つ

て居ない様です。そして

老「い、ぢやないか、死んだつて、私は死んだも

のを生かすことも出来るよ」

之を聞いた鈍太はわはて、

鈍「エ？何？お老爺さん、死んだものも生かすこ

とが出来るとつて！そんならそうと始めからそう

云へば何もやちもき急ぐのぢやなかつたつけ

そこで御家來から此事を王様に申上げると早速御

呼出しになつて直に死んだお姫様の處へ案内され

ました。

老人は室の戸を閉め切つて先づ釜に湯を沸かして

此湯でお姫様の身体をよく拭いて、それから懐か

ら大きなナイフを出してお姫様の首と手と足と胴

とを皆別々に切り離して仕舞つて、頓がて之を皆

釜の中へ入れて煮て仕舞ひました。ヌツカリ煮上

つて骨ばかりになつた頃に釜から出して之を机の

上に順よく並べて、

老「サアもう宜しい、立て！」

と云ひますと今迄骨計りの者がむく〜と動くか

と思ふと元の通りなお姫様になつて仕舞ました。

王様は大層お悦びになつて色々の御馳走をなされ

て幾日かの間は御殿の中に宿まつて居て方々、町

の中を見物して歩くことの出来る様にして下さい

ました。

一週間はかりの中、町の中も大体見て仕舞ひまし

たので二人は王様にお暇をして又も東の方へ旅立

つことに致しました。王様は夫れぢや何か褒美を

遣るから望のものを云へと仰せられましたが老人

は相變らず何も入りませんと云つて何も採りませ

ん。鈍太ははつと袖を引いて

鈍「おぢいさん、く、何だね何時もく、慾のないつてさ、斯う云ふ時に何か貰はなければ宿屋へ宿るにも困るぢやないか」

と云ひました。老人は首を振つて居て少しも貰うとしません。王様は此有様を見て

王「コン、道連の兵士其方は何かほしいと見える。何が欲しいか云ふて見い。思ふものを探らすぞ」と仰せられました。鈍太郎は早速大悦びでお金が欲しいと云ふことを申上げますと頓が

て王様の仰せで家來が金貨を澤山、鈍太郎の前に持つて來ました。鈍太郎は之をランドセルは勿論のことポケットでも風呂敷でも袋でも凡そ穴ある所へは詰められる丈詰込んでしまいました。門の外へ出てからも鈍太郎は嬉しくて堪らないので、時々ポケットから一つ二つ出しては眺めながらにこ／＼して居りました。そして

鈍「お老爺様、お前様も随分馬鹿な人だね、王様が御褒美にわざ／＼斯う云ふ者を呉れると云ふのに入らないなんて！」と云つてふと横を見ると今が今迄一所に歩いて居た老人が見ません。

「オヤ老人は何うしたらう」と振り歸へつて見ても見えません。まさか道を間違へた譯でもあるまいがと方々探しましたが、何うしても知れませんが仕方がありませんから鈍太郎は是から一人であちらこちらとお金のあるに任かせて方々を見物してとある町はづれに來た頃にはあれ程澤山なお金も最早あらかたなくなつて仕舞つた所でした。町に入つて見ると、どこ處の家でも笑ひ聲は聞えず唱歌の聲も聞えずシンリ閑として火の消えた後の様です。そして家毎には國旗の先きに黒い切をつけて出してありました。鈍太郎は何の事かサツバリわかりませんが併し唯事ではないと思ひましたので向ふから來た人に聞いて見ると是は昨日此國の王様の皇子が死なれた爲めだと云ふことがわかりました。鈍太郎は

「占めた。是はい、處へ來た」と手を打つて早速王様の御殿へ行つて

「私は死んだ人を蘇かへらすことが出來ます」と申上げると王様は豫て噂に聞いて居た兵士の道連に相違ないと早速御殿の中へ呼入れて直に其術を

遣らせることになりました。そこで鈍太郎は大釜と水を持って來させて置いて皆室の外に逐ひ遣りそして前に老人の爲た通りに先づ御湯で皇子の身體を清めて、それからジャックナイフで皇子の首と胴と手と足を切り離して釜の中へ入れてクツクツと煮て仕舞ました。偕しスツカリ煮上りましたので首を釜から出して机の上に並べて頓がて、「サア鼠う宜しい、立て」と云ひましたが骨は一向動ささうにもしないので何時迄たつても何の變りもありません。鈍太郎はむきになつて「サア最う宜しい、立て」と繰り返しましたが矢張だめでした。星はいけない。飛んでもないことになつてしまつた。何うしたら宜からう。是が王様に知れたら自分は定めし殺されてしまふに違ひない。さて困つた事になつたと鈍太郎は青くなつて振へて居りますと。先きの程鍵を掛けて置いた室の戸を開けて入つて來たものがあります見ると先達で道ではぐれたお老爺さんです。鈍太郎は思はず飛び出して、「お老爺さん、飛んでもないことをして仕舞つ

た。何うか御生だから援けて下さう」と云ふと「よし、そんなことだらうと思つたから今援に來たのぢや。が是からはもうこんな眞似をしてはいけないぞ。是は人間のするのではない」と云ひながら机の上の骨の順を並べ換て、そして「サア最う宜しい、立て」と云ふかと思ふと骨はむくむくと動いて若い皇子は元の通りの身體になりそして老人はふいと消えて何處かへ行つて仕舞ひました。王様は大層御悦びなされて何でも望みのものを御褒美に遣らうと仰せられました。鈍太郎は此時始めて夢の覺めた様な心持になつて、最う餘り欲張るのを止めて、そして世界中を歩くのも止めたいと思ひましたから其事を王様に申上げると王様も感心して「王様では、是れからお前は一生御殿の中の御客様にして置かう。行きたい所があるなら何時でも行かして遣らう。見たいものがあつたら何時でも見せて遣らう」と云ふことになりました。

# 會告

來る十三日午後一時卅分より

本所龜澤町江東幼稚園(龜澤町車庫前にて下車)

に於て本會第五一回常集會開

會致し候に付御繰合御出席下

され度候

明治四十二年二月

フレイバー會

# 各女學校御用

## 美術造花材料一式

半製品及鋸打拔類

## 摘細工材料

絹縮緬及金銀モジュール  
寫真臺紙柱掛

## 瓶細工材料

刺繡用絲及針

東京市本郷區眞砂町十五

卸小賣 百花堂 木村喜兵衛

地方御注文ハ代金引替ニテ郵送ス營業目錄御報次第郵送ス

明治四十二年二月一日印刷  
明治四十二年二月五日發行  
編輯者 東京市小石川區竹早町七二 東京市神田區錦町三丁目熊田印刷所  
發行所 女子高等師範學校内  
和 田 持 直 印刷者 日 下 主 計 發行所 フレール會